

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：12604

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K13152

研究課題名（和文）イギリス音楽教育における教員養成と職業専門性継続教育（CPD）の成果と課題

研究課題名（英文）Continuing Professional Development and Teachers Education in Music Education in England

研究代表者

森尻 有貴（Morijiri, Yuki）

東京学芸大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：90757478

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究はイギリスの音楽教育における職業専門性継続教育（Continuing Professional Development: CPD）の役割と現状を明らかにし、必要な支援を調査することであった。研究方法は文献研究、現地調査、イギリスのCPDで実践されている手法を日本で実施した成果の検討、イギリスでCPDの指導にあたる指導者への半構造化面接を実施した。イギリスの地域ごとに設置されたMusic Hubsの役割が重要であると同時に、音楽財団や音楽団体などの協力のもと、CPDが実施されている現状と共に、全科教員を含む初等教育教員と中等教育教員で必要な支援が異なることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果の学術的意義は、イギリスにおけるCPDの現状と課題について、現地調査を含む実態を明らかにしたことにある。教員として就職した後の職業専門性をどのように支援していくかについて、学校内だけでなく、地域社会と協働する支援体制が明らかとなった。また、学校や地域での取り組みの指針と国の声明としても統一している点で、教育支援への行政の立場としても示唆に富んでいる。このような取り組みは、今後の日本の教師教育や教員への支援体制を検討する上でも重要な成果であり、日本にとっても課題であると考えられる。本研究の成果が、今後の日本における教育課題への手がかりとなる可能性を含んでいる点で社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed to investigate the role of Continuing Professional Development (CPD) in music education in England and the expected support for further development. The project employed a literature review, field work in England, implementation of the idea of CPD in Japan, and semi-structured interviews with instructors for CPD in England. It revealed that Music Hubs in England played an important role in promoting music education in a local area and cooperated with music foundations and music organisations to run CPD sessions. In CPD, different support was thought to be required between generalist teachers in primary education and music specialists in secondary education.

研究分野：音楽教育

キーワード：音楽教育 CPD 職業専門性 教員養成 イギリス 教師教育

1. 研究開始当初の背景

イギリス（本研究ではイングランドのことを指す）では、国の教育規準となるナショナル・カリキュラムが2013年9月に改訂され、2014年9月より施行された。この改訂により、音楽科は初等教育と中等教育の双方で学習内容の詳細な記述が省略され、指導内容も4-6項目の箇条書きのみによって示され、大幅に簡略化された（Department of Education, 2013a; 2013b）。ナショナル・カリキュラムの簡略化は、実質、学校内での音楽科教育の指針の骨組みを残すのみとなり、具体的な指導内容は現場の教員に委ねられていると言っても過言ではない。また、イギリスには国定の教科書は定められていないため、学校の音楽科教育の内容や指導の質は、教員の音楽的能力、指導指針、教育力に依存する部分が非常に大きく、教育外部機関、音楽協会、研究機構等が音楽指導の方法や内容等を提案している（Daubney & Fautley, 2015; Fautley & Daubney, 2015）。これまでも、2003年に音楽教育におけるマニフェストが提唱され、それを期に音楽科教育が、学校外のコミュニティ音楽活動、高等教育、演奏家、文化庁、音楽財団、地域の音楽センター等と共同で、音楽教育の充実を目指していく動きが盛んになっていった（Zeserson, et al., 2014）。

以上のように、カリキュラムや教科書と言った公的な枠組みが非常に少ない中で、高等教育における教員養成の内容や、音楽教員自身が学び続けていくことを支援する社会的な制度は、重要な役割を果たしている（Zeserson, et al., 2014）。その一つとして、イギリスでは職業の専門性を継続的に高める Continuing Professional Development（以下、CPD）という概念が社会に浸透しており、高等教育での教員養成と、学校教育と社会との提携、CPDの充実は、音楽教育の発展に密接に関係している。しかし、CPDの需要と成果が存在する一方で、Zesersonら（2014）は、音楽教員の教員養成やCPDにおける課題として、学習の機会や内容の充実を更に向上させることや、多様化する学習方法の選択肢の中でも、教育の質を一定以上に担保する必要性を挙げている。

イギリスにおける社会的なCPDの制度や概念を調査し、その成果や課題を検討することによって、我が国においても、その概念や成果を参考とすることは有益であると考えられる。イギリスにおける教師教育を、教員養成課程とその後の継続教育を一貫して研究し、その具体的成果と課題を調査することは、教育者を長期的にどのように育てていくかに通じ、教員養成の役割を再考することに貢献すると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、イギリスの音楽教育における動向と成果、課題等を踏まえた上で、職業専門性継続教育（CPD）の内容と役割について検討し、音楽科を指導する教員が、どのように音楽的および、教育的な専門性を継続して高めていくことが可能であるか明らかにすることを目的とする。教師の育成に関して、どのような社会的体制が取られ、支援されてきているかを調査し、取り組みの現状と課題を検討する。イギリスにおけるCPDの現状と成果、課題、社会的支援の可能性に関して調査し、どのようにCPDの支援が必要とされているかについて考察することにより、今後の長期的な教育者養成の可能性を検討することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、まずイギリスにおけるCPDの現状を文献研究により調査し、研究の中核となる職業上の専門性継続教育の概念を明らかにした。その上で、イギリスでの実地調査研究を通じて、現状及び成果と課題の考察を行った。訪問先は、CPDの研修を実施している音楽財団や音楽団体、地域に設置されたMusic Hubs、教員養成を実施している大学が主であった。イギリスでの音楽指導概念を取り入れ、日本においても実践的検討を試みることによって、その教育的価値について検討を行った。更に、CPDの研修等に関わる専門家へ半構造面接を実施し、指導者側からの知見を得ると共に、CPDにおける現場に即した課題を明らかにした。

なお、研究期間中、コロナウイルス感染症の影響で、当初計画より一部研究方法等を変更して実施した。特に、イギリスは世界的パンデミックによる行動制限を重く設けた国の一つであり、そのような社会的背景が本研究の調査にも影響を及ぼした。

4. 研究成果

本研究は、文献研究、イギリスでの研修実態の現地調査、日本における実践的検討、イギリスの教員研修に携わる音楽家へのインタビューを通して、以下のような研究成果を得た。

(1) 文献研究

文献研究においては、政府が公表した文書や研究者らによる提言や研究論文をもとに、イギリスの音楽教育の現状について検討を行った。その中でも社会的背景として、2010年に制定されたアカデミー法や、同年に発表された英国バカロレア（English Baccalaureates: EBacc）は、現在のイギリスの音楽教育へ大きな影響を与えていることが明らかとなった。アカデミー法は、該当す

る学校へ、実質ナショナル・カリキュラムに準拠しない学習・指導を可能とする役割があり、それによってアカデミ化した学校が近年で急速に増加している現状がある。また、英国バカロレアは、政府が学校教育で重要視する教科を示した結果となり、そこには芸術科目が含まれていないことから、音楽教育の重要性を対外的な理由で主張することが一層困難になったと言える。

そのような学校教育を取り巻く現状の中で、音楽教育へ影響を及ぼしたと考えられる声明に National Plan for Music Education (NPME) があった (Department for Education, 2011)。2011 年に発行された NPME には、音楽教育の様々な指針が明記されたが、その中でも注目すべき内容として、イギリスの各地域に設置された Music Hubs の役割があった。Music Hubs は音楽センターと類似した機関であり、その地域の音楽教育の発展に貢献する役割を担っていることから、地域の学校の音楽科教育のみならず、現職教員への研修 (CPD) も実施している。管轄地域の学校と、プログラムを提供する音楽財団や音楽機関を繋ぎ、様々なプログラムを展開したり、学校のカリキュラムへの助言を行ったりする役目があることから、学校の音楽科教育を学校外から支援する上で影響力が高いと言える。この Music Hubs の手腕と、教員研修に携わる専門家が、現職教員の CPD においては重要な役割を果たしていることが明らかとなった。

文献研究から、イギリスの音楽科教育において、地域社会からの支援や協力によって成立する仕組みが構築されており、CPD においても、音楽の専門性が高いプロの演奏家や音楽財団が指導にあたることによって、音楽科教員の音楽的専門性を高めようとする指導が可能であることも示唆された。一方で、学校内の教職員のみでは音楽科教育を推進することは困難である可能性が高く、Music Hubs をはじめとする学校外機関に、運営面も含めた支援責任の多くが委ねられている現状も明らかとなった。

(2) 現地調査

イギリスでの現地調査として、地域ごとに設置された Music Hubs を訪問し、聞き取り調査及び資料収集を行った。その結果、Music Hubs が提供する音楽教育の支援体制には、どの程度その Music Hubs や地域が財源となる資金を獲得しているか、外部音楽団体との協力体制を築くことができているか、器楽や歌唱など多様な音楽学習に対応した指導が提供可能か、学校の音楽教師や学校長が Music Hubs の提供するプログラムへの参入に積極的か、などの側面が重要な事項であることが明らかとなった。

Music Hubs が介入する音楽プログラムのうち、地域の複数の学校が参加する小学校向けのプログラムの見学を行った。そこでは、Music Hubs が提携する音楽財団に所属する専門家による指導が行われていた。このような場で指導を行うのは学校の音楽科教員ではなく、プロの音楽家でありながらも、教育的指導を恒常的に実践している専門家であり、小学生向けの指導を行っていた場を主に見学した。隣接する数校が教会や施設に集まり、合同で音楽活動をし、教師はその場に引率する形をとっており、プログラムの終了時には保護者を招いたコンサート形式での発表会を実施する団体も見られた。アウトリーチが盛んに行われる一方、学校側が移動をして参加するプログラムも盛んであることが特徴と言える。

更に、Music Hubs が実施する現職教員への研修の見学を行った。研修ではまず、学校の運営上、必要な事項に関する一般的な内容や共通する内容の研修が行われた。そこには SEND (Special Educational Needs and Disabilities) とイギリスでは呼ばれる、特別な支援を必要とする児童・生徒に対する指導や、児童・生徒への接し方、学校内での教員同士の協力体制なども含まれていた。音楽の研修では、主にワークショップ型研修が実施された。参加者全員を対象とした一斉指導の形での音楽活動を伴う研修と共に、分科会形式での研修も行われた。研修では主に、教員自身の音楽的技能の研鑽を目指す内容と、音楽の指導方法の知見を広げる内容に二分された。

(3) 日本における実践的検討

音楽科の指導は、イギリスと日本の両国において、初等教育に携わる全科教員にとって、学校教育の中で指導が難しいと感じる教員や苦手意識が高い教員が多いことが報告されてきた。イギリスでの音楽教育の手法の利点と成果を、日本における教員養成や教員研修へ援用する可能性を検討する上でも、イギリスでの指導を教員養成大学の学生に体験の場を設け、その成果と課題を考察することとした。

イギリスの音楽財団に所属し、現地の教員向けに CPD の研修を実施している実践者を日本へ招き、教員養成大学にてその内容の一部を実施し、参加者からのフィードバックを得た。教員養成大学において、音楽以外の教科を専門とする学生を対象に CMM (Creative Music Making) の概念を中心としたワークショップを実施し、50 名より自由記述の回答を得た。CMM のワークショップへの意見を KH Coder 3 alpha を用い、テキスト・マイニング・アプローチを実施した結果、Table2 に示されるような単語で記述されていたことが分かった (Morijiri, 2020)。全データ 2,915 語のうち、1,172 語が分析対象となり、再頻出単語である「楽しい」に紐づいた単語として「リズム」、「考える」、「模倣」、「音楽」、「指導者」などが挙げられ、subgraph を形成した。模倣による即興的な表現の音楽活動に新規性、教育的有用性の意見が見出されたと共に、楽しさを感じながら授業運営において有益であるとの見方が強い結果となった。また、全科教員を想定した実践として、リズムの模倣を中心とした、楽譜を用いない CMM を取り上げたことから、即興的な表現へ新たな可能性を見出した参加者が多いことが成果として挙げられた。一方で、多声的な音楽の即興表現は、技術的な難しさや遠慮の意識が最も高まった活動となり、先行研究でも報告され

ている音楽特有の困難さを意識しやすい活動であることが示唆された。音楽活動は、音楽学習そのものへの還元性を期待するだけでなく、集中力等の面から、音楽科の授業外の場面での有効性を提案する意見も報告された。

Table 2 *Extracted words and frequency*

Words	Frequency	Words	Frequency	Words	Frequency	Words	Frequency
Enjoy	46	People	12	Workshop	6	Listen	5
Music	35	Myself	11	Different	6	Method	5
Think	35	Use	10	Like	6	Impression	4
Rhythm	24	Move	10	Receive	6	Activity	4
Sing	22	Fun	10	Good	6	Participate	4
Sound	19	Chord	10	Language	5	Useful	4
		Appreciate					
Feel	17	each	9	Pupils	5	Time	4
Instructor	15	Together	9	Natural	5	Concentrate	4
Copy	14	Difficult	8	Various	5	Before	4
Class	13	Beginning	7	All	5	Communicate	4
Body	13	Make	7	Experience	5		

* Words that appeared more than 4 times

(Morijiri, 2020, p.25)

(4) 半構造化面接

イギリスで CPD の研修指導の経験がある専門家 10 名に半構造化面接を実施した。質問項目は、これまでの CPD の内容、初等教育および中等教育の音楽科指導において問題であると認識していること、CPD において困難を感じる内容、などが主な内容である。録音データから逐語録を作成し、主題分析を行った。その結果、初等教育に携わる教員と中等教育に携わる教員に対する課題には相違点が見られた。

初等教育の教員においては、音楽技能や音楽的知識が不十分であることから、選曲等をはじめとする教材研究の視点、音楽的な内容の理解、音楽表現の充実などに課題が見られることが明らかとなった。特に、音楽的な技能や知識に自信のない教員は、同時に音楽の指導力においても困難さを示すことが多い現状が、学校教育の中での音楽科の指導が発展しないことの一因であるとの考えが強く示された。CPD の研修においては、音楽に対する特別な教科であるという認識や、演奏をすることは難しいといった考えを払拭するようなアプローチを心がけている指導者の姿勢が浮き彫りとなり、それらは、音楽科の指導に対する小学校全科教員の意識が前提にあると考えられる。

一方で、中等教育に携わる音楽科教員は、音楽大学等を卒業している場合も多く、特定の専攻への専門性が高い傾向がある。音楽的知識や演奏技能は高い傾向がある一方で、専攻した分野(例：声楽、管楽器)以外の音楽の指導に対しての懸念を持ち合わせている場合もあり、学校の音楽科として幅広い音楽活動を展開することへの課題が報告された。また、音楽的スキルが高い一方で、教育的手法への理解に関しての研修の必要性もあげられ、生徒へどのように指導を行ったら音楽的スキルを伸ばすことができるか、という視点で音楽の学習を組み立てていく力においても、CPD で更なる支援が必要であるとの見方も強調された。授業の展開の方法や指導計画の立て方等、教育的知見を兼ね備え、より幅広い音楽専門性を担保することが課題であると言える。

このような初等教育と中等教育における乖離は、2022 年に新たに発行された National Plan for Music Education (Department for Education, 2022) においても指摘されている。本声明には、Music Hubs が地域の学校とより一層の協力体制を築き、さらに優れた CPD のプログラムを提供するよう述べられている。CPD の指導者からの知見は、初等教育と中等教育の音楽科教員において、それぞれの研修内容の需要や必要性を明らかにしたものであり、不足しているスキルを補う研修が目指されることが、初等教育と中等教育の乖離を改善する一つの視点であることが示唆された。

[引用文献]

- Department for Education (2013a). *Music programmes of study: key stages 1 and 2*.
- Department for Education (2013b). *Music programmes of study: key stages 3*.
- Department for Education (2011). *The importance of music: National Plan for Music Education*. Retrieved from:
https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/180973/DFE-00086-2011.pdf
- Department for Education (2022). *The power of music to change lives: a national plan for music education*. Retrieved from:
https://assets.publishing.service.gov.uk/media/62bc1242d3bf7f292040d364/The_Power_of_Music_to_Change_Lives.pdf
- Daubney, A. and Fautley, M. (2015). *ISM - The National Curriculum for Music: An assessment and progression framework*. ISM
- Fautley, M. and Daubney, A. (2015). *The National Curriculum for Music: A framework for curriculum, pedagogy and assessment in Key Stage 3 Music*. ISM
- Morijiri, Y. (2020). Impact of Creative Music Making and Improvisational Approaches for Non-Music Specialists: A Case Study in Teacher Education in Japan. *Asia-Pacific Journal for Arts Education*, 19 (2), 10-44.
- Zeserson, K., Welch, G., Burn, S., Saunders, J., and Himonides, E. (2014). *Inspiring music for all: next steps in innovation, improvement and integration*. Paul Hamlyn Foundation

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Yuki Morijiri	4. 巻 19(2)
2. 論文標題 Impact of Creative Music Making and Improvisational Approaches for Non-Music Specialists: A Case Study in Teacher Education in Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Asia-Pacific Journal for Arts Education	6. 最初と最後の頁 10-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森尻有貴	4. 巻 72
2. 論文標題 イギリスにおける2010年以降の教育政策と音楽教育への影響	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 463-474
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Yuki Morijiri, Paul Smith
2. 発表標題 The perceived impact of learning approaches from Creative Music Making abroad for Japanese students in teacher education
3. 学会等名 The 12th Asia Pacific Symposium for Music Education Research (APSMER) 2019（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森尻有貴
2. 発表標題 イギリスの中等教育修了試験（GCSE Music）に置ける内容分析 - 試験機関の相違における比較検討 -
3. 学会等名 日本音楽教育学会第50回東京大会
4. 発表年 2019年

1．発表者名 森尻 有貴
2．発表標題 イギリスの学校音楽科教育に対する社会的な取り組み -2010年以降の変化に着目して-
3．学会等名 日本音楽教育学会第49回岡山大会
4．発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------